

たまねぎの需給動向

調査情報部



たまねぎ (北海道産)



サラダたまねぎ (佐賀県産)

主要産地



資料：農林水産省「平成28年産野菜生産出荷統計」

注：図中の番号は収穫量の多い順番、期間は主な出荷期間を表している。

たまねぎは、カレーやシチューなどの定番料理のほか、おつまみでおなじみのオニオンリングフライ、サラダに添えて香りや歯触りを楽しむオニオンライスなど幅広い調理法に対応でき、世界中で愛されている野菜のひとつである。

品種としては、春先に出回り新たまねぎとして知られる「秋まき種」と夏から秋に収穫する黄色い皮が特徴で長期保存に適した「春

まき種」に大きく分けられる。国内最大の収穫量を誇る北海道では春まきの貯蔵たまねぎが主流となっており、通年、供給できる体制が整っている。

その他、鮮やかな色で彩りに使われる赤たまねぎやグリーンの葉の部分を利用する葉たまねぎ、ペコロスと呼ばれる一口サイズのたまねぎなどバラエティも増えている。

作付面積・出荷量・単収の推移

平成28年の作付面積は、2万5800ヘクタール（前年比100.4%）と、前年よりわずかに増加した。

上位5県では、

- 北海道 1万4300ヘクタール（同100.7%）
- 佐賀県 2580ヘクタール（同 95.6%）
- 兵庫県 1720ヘクタール（同 99.4%）
- 長崎県 823ヘクタール（同106.1%）
- 愛知県 609ヘクタール（同100.3%）

となっている。

28年の出荷量は、110万7000トン（前年比98.5%）と、前年よりわずかに減少した。

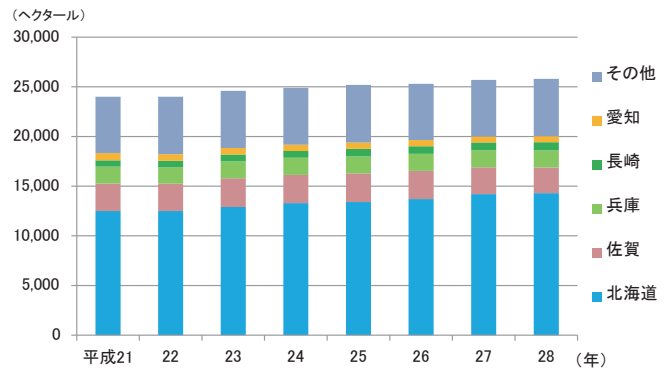
上位5県では、

- 北海道 78万3000トン（同102.8%）
- 兵庫県 7万8000トン（同 96.2%）
- 佐賀県 7万4500トン（同 68.9%）
- 愛知県 2万8300トン（同112.7%）
- 長崎県 2万2300トン（同 79.6%）

となっている。

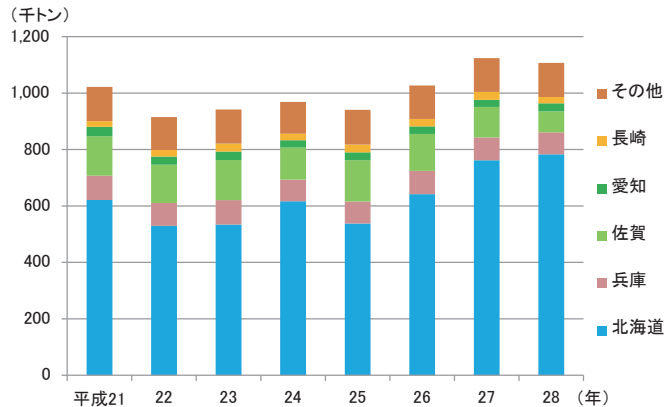
出荷量上位5道県について、10アール当たりの収量を見ると、北海道の5.90トンが最も多く、次いで愛知県の5.23トン、兵庫県の5.06トンと続いている。その他の県で多いのは、栃木県の5.40トン、富山県の4.70トンであり、全国平均は4.82トンとなっている。

作付面積の推移



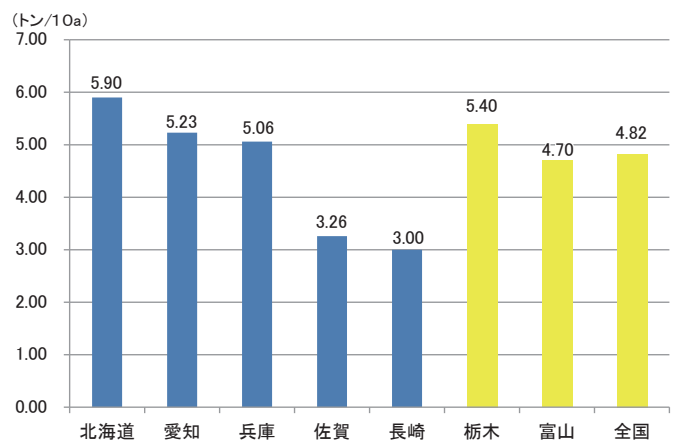
資料：農林水産省「平成28年産野菜生産出荷統計」

出荷量の推移



資料：農林水産省「平成28年産野菜生産出荷統計」

平成28年の主産地の単収



資料：農林水産省「平成28年産野菜生産出荷統計」

注：黄色は、出荷量上位5道県以外で単収が多い2県および全国平均。

作付けされている主な品種等

出荷量が最大の北海道は貯蔵たまねぎの産地であるが、九州地方は新たまねぎの産地としても有名である。

作付けされている品種を見ると、高温に対する感受性が高いため北の産地と南の産地で大きく品種が異なる。

都道府県名

主な品種

北海道 北もみじ 2000、オホーツク 222、北はやて 2 号

兵庫県 七宝早生、ターザン、もみじ 3 号

佐賀県 貴錦、スーパーアップ、レクスター、早生七号、アドバンス、ターザン、もみじ

愛知県 早生七号、レクスター、アドバンス、KA948

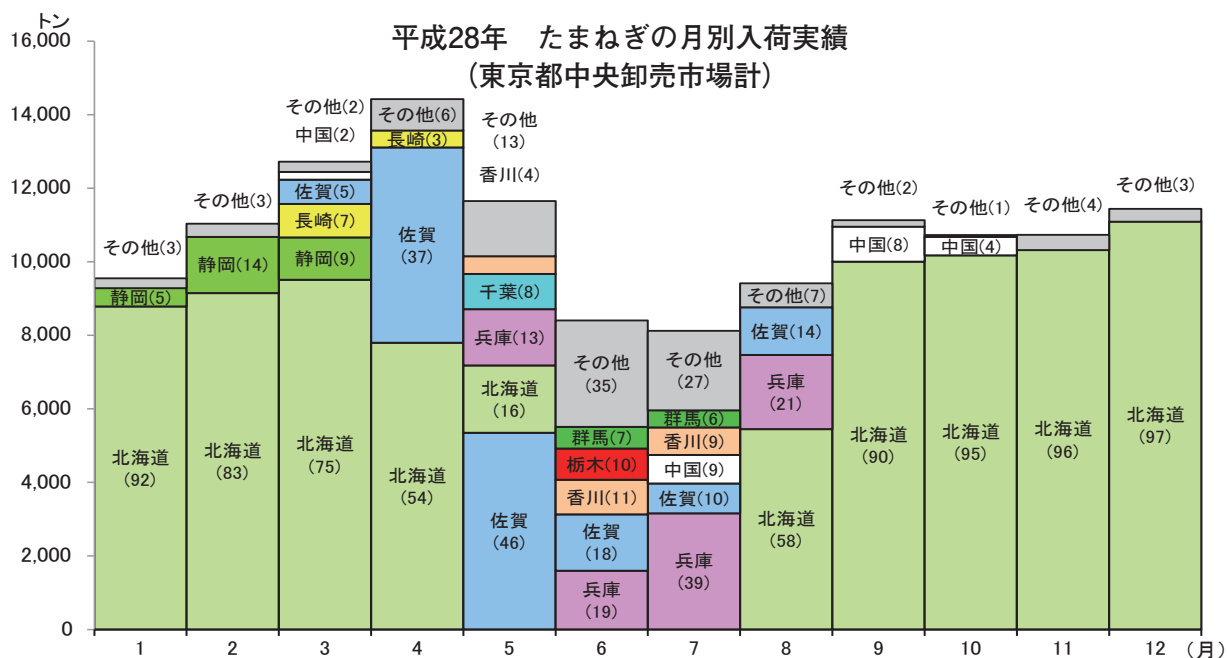
長崎県 貴錦、七宝早生、浜笑、浜ゆたか、レクスター、アンサー、ターザン

資料：農畜産業振興機構の関係者聞き取りによる。

東京都・大阪中央卸売市場における月別県別入荷実績

東京都中央卸売市場の月別入荷実績（平成28年）を見ると、北海道産と九州産が同時に入荷する4月が最も多く、佐賀県産、兵庫県産の入荷が増える5月から7月の夏場にか

けて減少し、8月以降はふたたび北海道産が多くなり9月以降は入荷し1万トン前後で推移する。

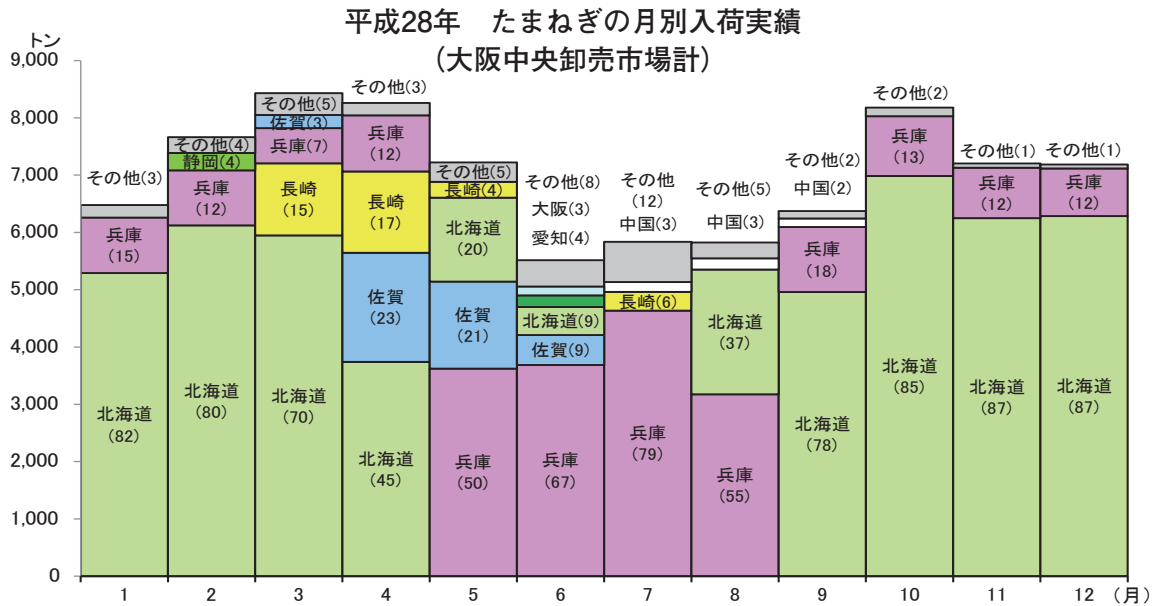


資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：平成28年東京都中央卸売市場年報）

注1：（）内の数値は、月別入荷量全体に占める割合（%）である。

大阪中央卸売市場の月別入荷実績（平成28年）を見ると、東京市場と同様に北海道と西の産地が同時に入荷する春先の入荷が最

も多い。兵庫県産は通年入荷しており、特に5月から8月の入荷が多い。

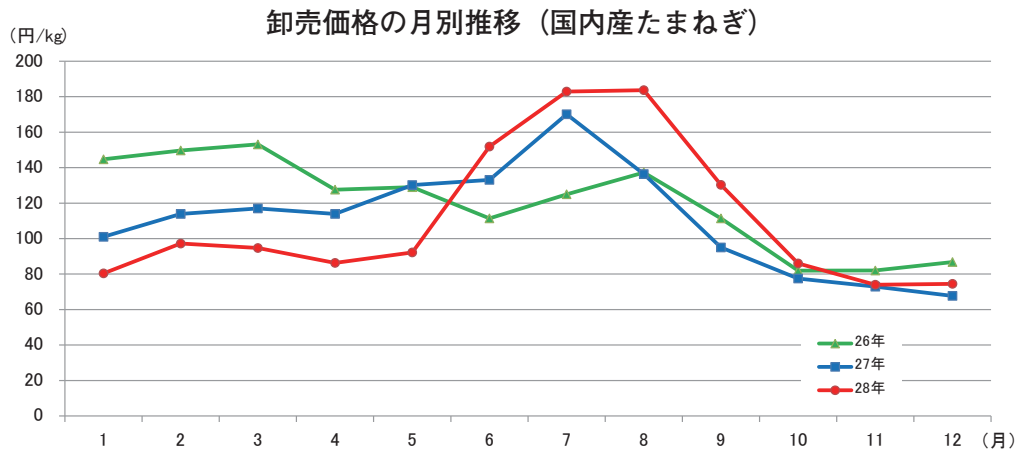


資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：平成28年大阪市・大阪府中央卸売市場年報）
注1：（ ）内の数値は、月別入荷量全体に占める割合（％）である。

東京都中央卸売市場における価格の推移

東京都中央卸売市場における国内産たまねぎの価格（平成28年）は、1キログラム当たり80～183円（年平均106円）の幅で推

移している。6月から8月ごろまでは上げ基調で推移し、9月から12月ごろにかけて下げ基調に転ずる。



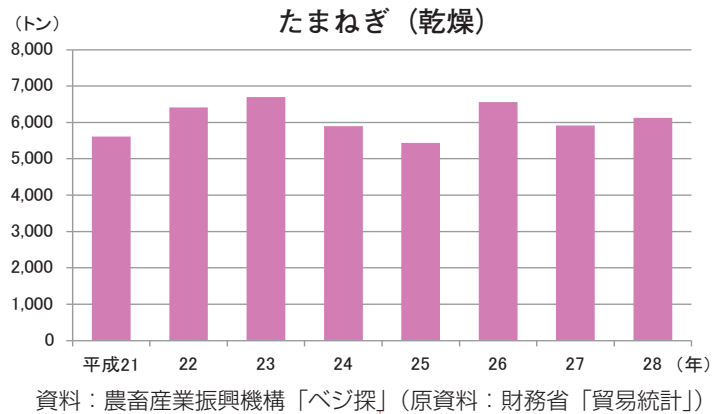
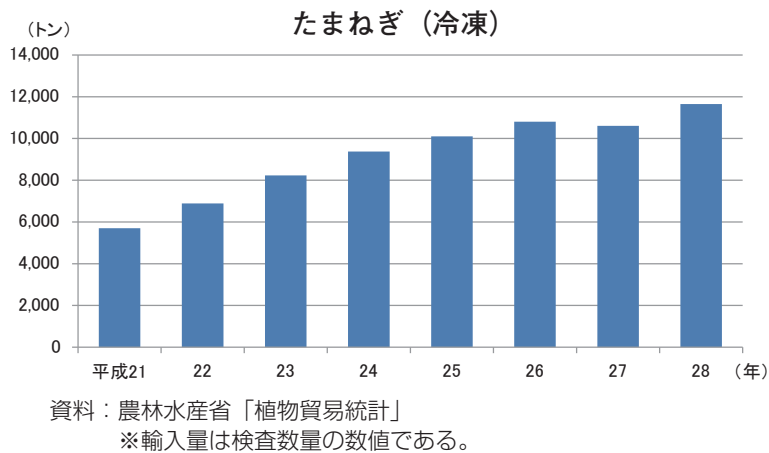
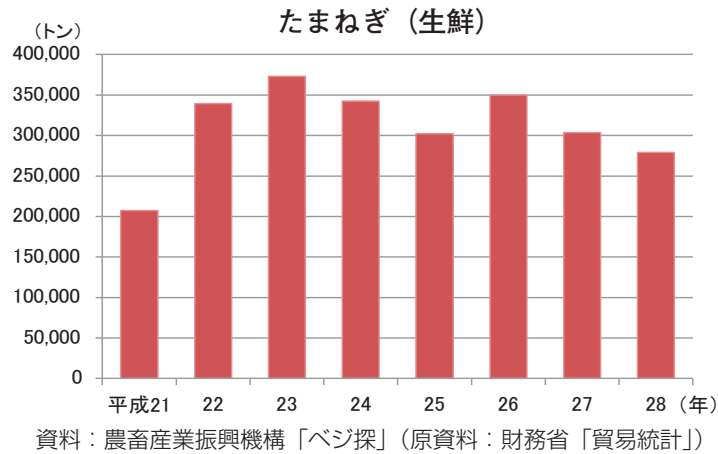
資料：農畜産業振興機構「ベジ探」（原資料：東京都中央卸売市場「市場月報」）

輸入量の推移

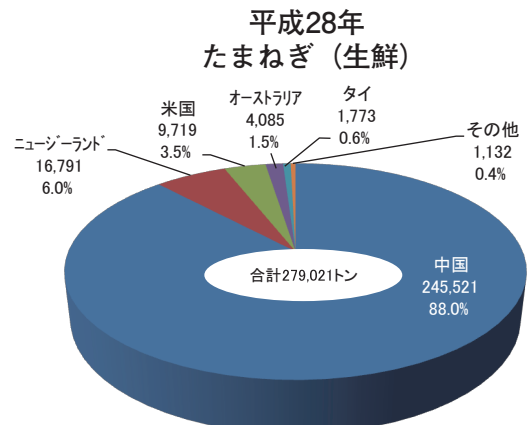
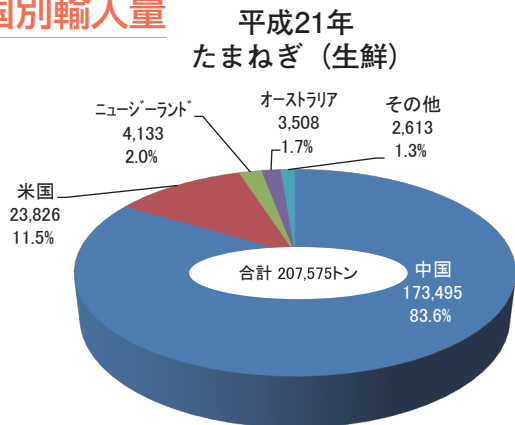
たまねぎは家庭での消費以外に中食や外食での利用が多い食材でもあり、生鮮野菜のなかでもっとも輸入量が多い野菜である。

平成28年の生鮮たまねぎの輸入量は平成21年の1.3倍となっており、中国産、ニュージーランド産の輸入が増える一方で米国産が急減しているのが特徴である。

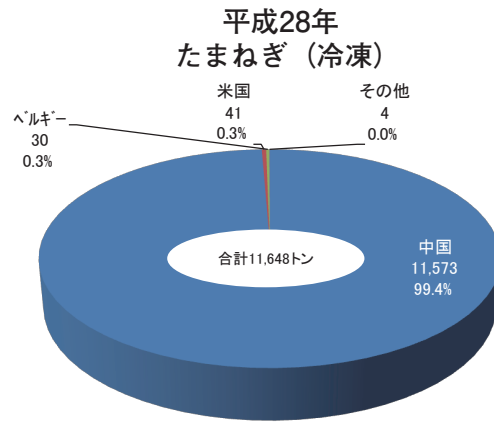
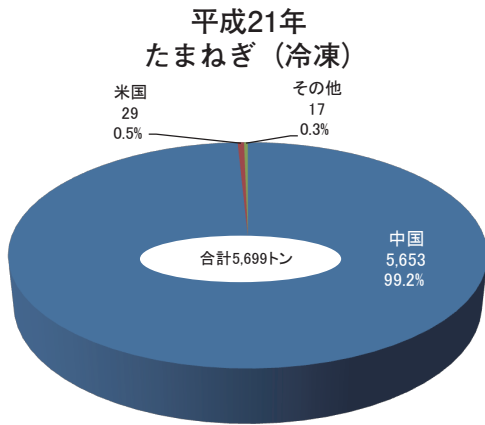
冷凍たまねぎについては、平成21年以降、右肩上がりで推移し、平成25年以降は1万トンを超えて推移している。乾燥たまねぎの輸入については数量、輸入国ともに大きな変化はみられず、米国が約6割、中国が約2割を占めている。



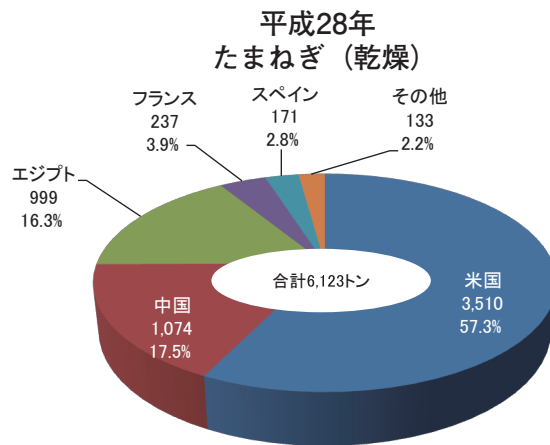
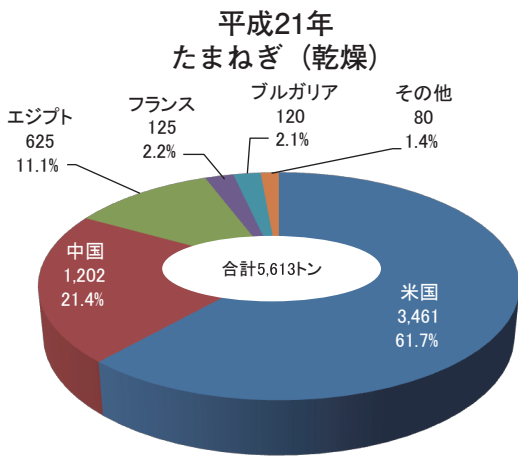
国別輸入量



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」(原資料：財務省「貿易統計」)



資料：農林水産省「植物貿易統計」
※輸入量は検査数量の数値である。



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」(原資料：財務省「貿易統計」)

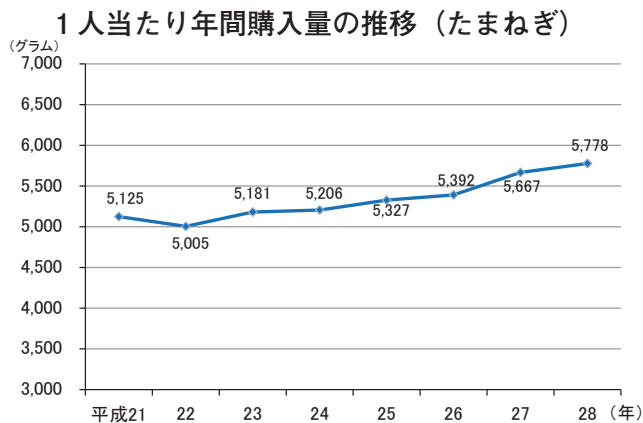
消費の動向

たまねぎは、野菜のなかでキャベツに次いで購入量の多い野菜である。

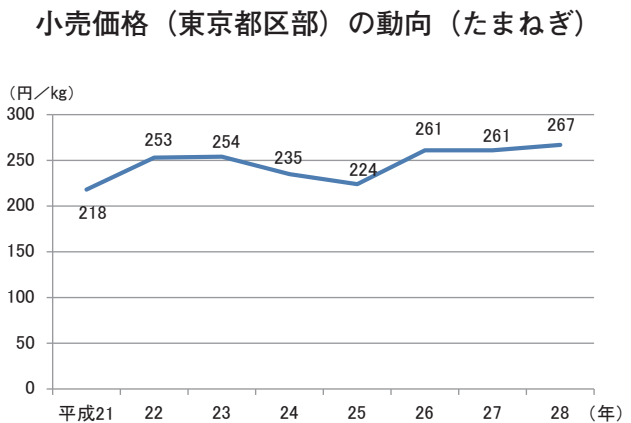
1人当たりの年間購入量の推移を見ると5000~5800グラムで推移しており、ゆるやかに上昇している。

小売価格は平成26年以降、1キログラム当たり260円程度で推移している

たまねぎに含まれる硫化アリルの一種であるプロピルメチルジスフィドはコレステロールの代謝促進や血栓予防に効果があり動脈硬化の予防につながることから「たまねぎは血液をサラサラにする」という認識も広まっており、健康志向の高まりとともに関心が高まっている野菜である。



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」
(原資料：総務省「家計調査」)



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」
(原資料：総務省「小売物価統計調査」)